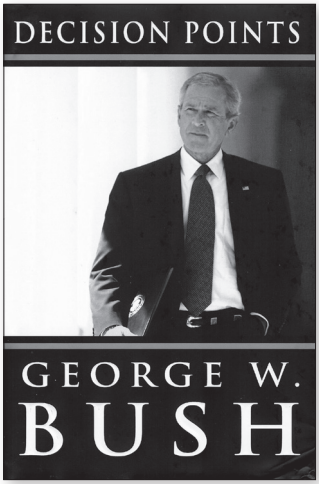
@ book café

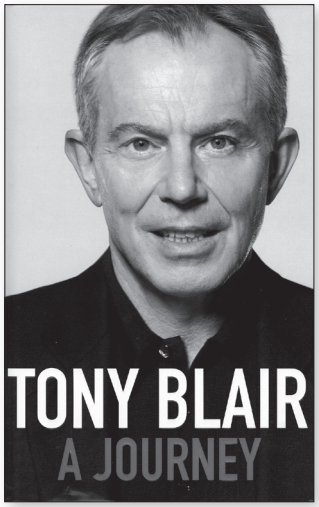
書評〈洋書〉

聖人と弁護士——ブッシュとブレアの時代

選評 東京大学先端科学技術研究センター准教授 **池内 恵**



George W. Bush, *Decision Points,* New York, Crown Publishers, 2010.10.



Tony Blair, *A Journey,* London, Hutchinson, 2010.9.

ジョージ・W・ブッシュ前米国大統領の自伝は、「止めた日のこと」から始まる。大統領の職を辞した日ではなく、飲酒を止めた日である。1986年、40歳の誕生日の日、気のおけない友と飲みあかし、じゃれあい、心地よく法外な代金を支払って眠りについた。その翌朝、ブッシュは二日酔いの中、深い自責の念に苛まれる。そして妻に告げる。二度と酒は飲まないと。

ブッシュは自らの政治的キャリアを、禁酒に始まる「第二の人生」への転生、回心の体験を軸に記していく。「信仰と家族」がブッシュの哲学

であり、判断基準である。

確かにこのストーリーは、米国の多くの市民に共感を呼ぶのだろう。酒に溺れ、父への劣等感に苛まれ、失敗と愚行を繰り返す不肖の息子が、献身的な妻と、神の啓示の書に導かれ、回心する。世界を導く立場に押し上げられ、邪悪なる敵の挑戦を受けて立つ。ブッシュの回顧録はあたかも「聖人物語」のようだ。

ブッシュがしばしば披露する粗野なエピソードも、聖人の回心譚としてはかえって効果的だ。父ブッシュのメイン州の邸宅で催されたある夏の夕べ、いつも通り酒が入って上機嫌の子ブッシュは、両親の友人のご婦人に「それでさあ、50歳を超えたセックスはどうなの?」と口走る。会食の席は凍りつき、一同は慌てて話題を変える。両親の冷たい視線が突き刺さる。悔い改めたブッシュが50歳の時、テキサス州知事になっていた。彼のもとに、「ジョージ、どうなの?」とそのご婦人から手紙が来る、というオチが付く。このような赤面する失敗を披露する方が、隙のないエリートよりも、大衆の人気を博すのだろう。

何かと注目される偉大な父との関係も、抜き差しならない不和などなかった、といなしてみせる。「現実はこういうこと。私は酒飲みの息子で、それで父はもちろんいらいらした。でも互いにそんなことは、さほど気にも留めていなかった。20年もたって、それが新聞に載って初めて、気付いたのさ」と振り返る。「ない」と否定するほどにじみ出る父への屈折。それでも年を経て、尊敬と愛慕が次第に湧き上がり徐々に屈託を溶かしていく。この「浪花節」が、政治家ブッシュの真骨頂なのだろう。学位や経歴、弁舌やスタイリストで武装したエリート政治家には真似ができないところだろう。

宗教的な信念から、「誘惑」に打ち勝ち、「利己心」を退けることに自らの人生の（そしておそらくは政体としてのアメリカの）課題を見出すブッシュは、9・11事件という、まさに宗教的な信念によってアメリカに挑んでくる事象に直面した時の大統領として、ふさわしかったのだろうか。確かに、前例のない極限の状態で、さかしらな理屈は通用しなかったに違いない。頑固に単純な信念を持った大統領の下でこそ、アメ

リカは団結して立ち上がることができた、と言えよう。

しかしやはり、「ふさわしすぎた」という疑念が拭えない。信仰に信仰で真っ向から対峙してしまったところに、「対テロ戦争」を収拾困難に拡大させた一つの原因が見出せるのではないだろうか。

２０００年の大統領選挙の一般投票では民主党のゴア候補が上回り、選挙人投票で、実弟ジェブ・ブッシュ知事が治めるテキサス州での裁判に持ち込まれた「判定勝ち」によって辛うじてブッシュは勝利した。就任当初は、果たしてこの政権が国民から明確に信任されたものなのか、確信が持てない人も多かったのではないか。それが、9・11事件によって、国民を通り越してもはや「神」から「ミッション」を与えられた。そのように深く感じ取って疑わない人物が大統領の地位にいた。

このブッシュとどこまでも付き添ったのが、トニー・ブレア元英首相である。こちらは「弁護士」あるいは「弁士」の風情である。とにかく饒舌だ。ブッシュの2倍は書き込んでいそうな密度の回顧録である。国家の最高指導者としてのキャリアも長い。「ニュー・レイバー」を標榜（ひょうぼう）して労働党を立て直し、北アイルランド和平や、コソボ介入で、紛争解決や外交の実績も積んでいた。それだけでも歴史に名が残っただろう。「ブッシュのアメリカ」と一蓮托生となった任期後半で、ブレアへの評価は、評価の分かれるものとなった。「血塗られた」と非難され、「嘘つき」となじられるものともなった。

ブレアの回顧録の後半を彩るのは、逡巡（しゅんじゅん）であり、懐疑である。「より良く、異なるやり方が可能だったはずだ」といった「仮定法」の表現が頻出する。あらゆる決断について記すたびに、悔恨が忍び寄ることをブレアは隠さない。それを打ち消す理論武装をブレアは不断に求め続ける。そして彼もまた、最後には信仰に帰る。ただしその信仰は、宗教的なものを背景にしつつ、「西洋（the West）」の普遍性を打ち出すものである。

例えば9・11事件直後の対応について、ブレアは二つの選択肢が考えられた、と理詰めで説いていく。第一は、タリバン政権を制裁と同盟・多国間協調で追い詰めていく。その選択肢は確かに存在した、という。し

かし自らは第二の選択肢、すなわち軍事的な対処を採用した。その選択肢のコスト、波及した帰結は、予想を超えていた。しかし、当時得られた情報と見通しの下では、軍事的な選択肢を採る以外にはなかったのだと論じる。

「このような状況下で、得られる情報の範囲で、唯一の道は、本能と信念に従うことだ。それ以外にすることはない。それこそが、悲劇の直後の日々に私がしたことだった」。ブレアにとっては、「本能と信念」に従った選択についてさえも、言を尽くして説明する必要がある。そして説明が尽くされてもなお、それが「正しかった」「適切だった」かどうかは、断定できないのである。

ブレアが自らの選択の最終的な根拠にするのは、英国が直面しているのが究極には「理念の戦い（battle of ideas）」であるという認識である。「われわれは新たな闘いの場にいた。それは政治そのものよりも、宗教と文化をめぐるものだ。しかしここでも勝利への道は、私の判断によれば、同じだ。軍事的に立ち向かえ。されども悪の理念を打ち負かすには、より良い理念をもってするしかないことを、思い知れ、と」。

ブレアが恐れるのは、先進世界の厭戦気分である。「イラクとアフガニスタンで、彼らは気づき始めた。われわれには大きな犠牲を払う闘いの準備ができていないと。彼らは、日々弛まず、地の利のある場所で〔中略〕闘いを続ければ勝てるのだ、と気づき始めている。力と資源で勝っているからでも、より魅力的あるためでもなく、執拗さによって、勝てるのだと」。

なお、ブレアの回顧録の写真ページには、「嘘つき（Bliar）」のプラカードをはじめとした反対勢力の姿と主張が多く写り込んでいる。対称的にブッシュの回顧録では、本文中にも、写真にも、ブッシュの世界観に合わない立場の声は入ってこない。迷いなき信念に支えられたブッシュと、反対勢力の主張に多くの理を見出すことを隠し切れない苦悩するブレアの組み合わせは、一つの時代の世界を動かした。

（いけうち さとし）